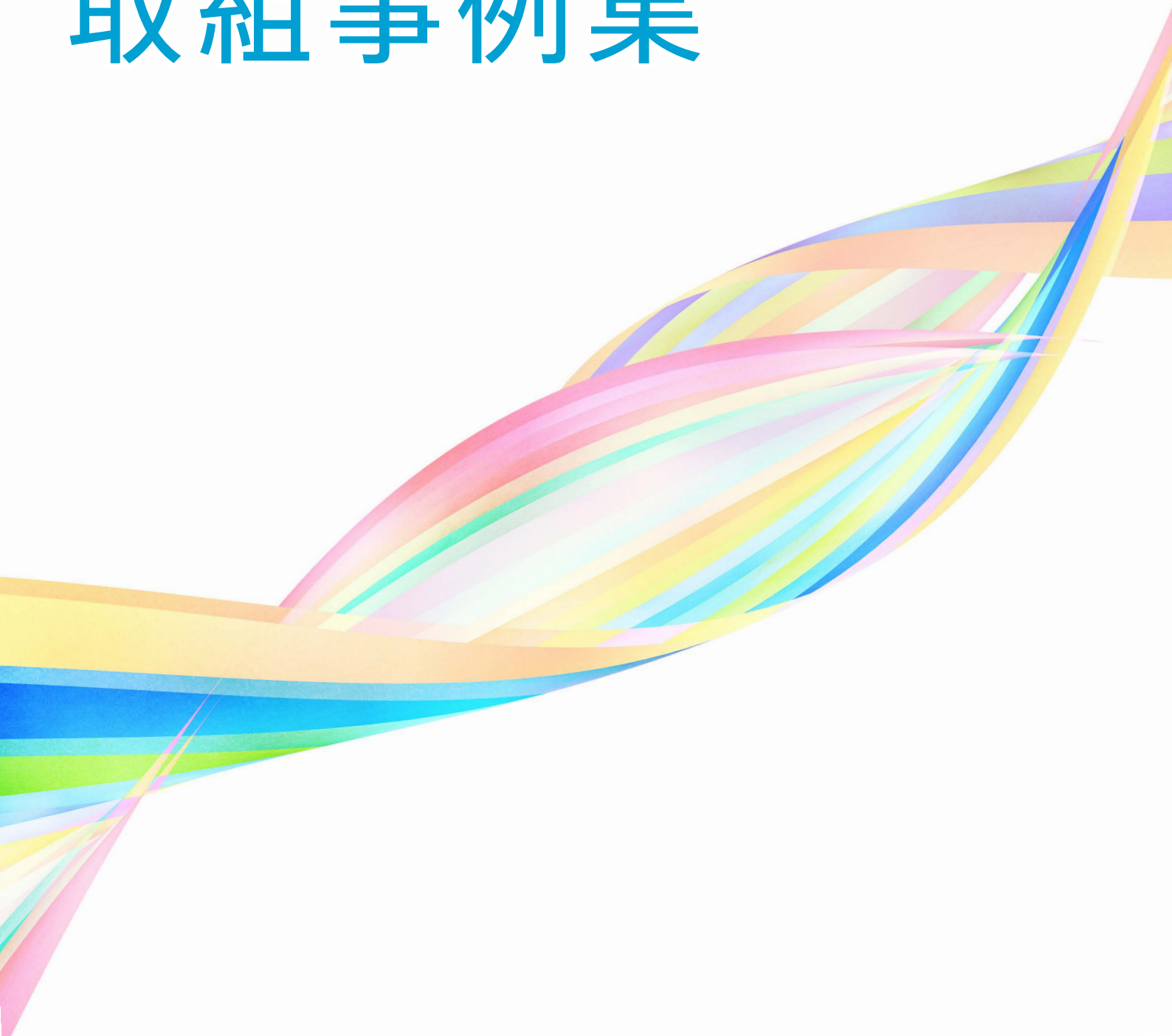


平成29年度
地域経済産業活性化対策費補助金
(被災12市町村における地域のつながり支援事業)

取組事例集



はじめに

本事業は、福島相双復興官民合同チームの個別訪問活動を経て集められた被災地域の声や要望を基に、経済産業省で平成28年度に設けられた新しい事業です。東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴い避難指示等の対象となった福島県田村市、南相馬市、川俣町、広野町、楢葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村及び飯舘村における被災者の人々とのつながり創出を通じ、地域の活性化、さらには産業振興やまちづくりにも資するような取組を支援することを目的とし、平成29年度「地域経済産業活性化対策費補助金（被災12市町村における地域のつながり支援事業）」を実施しています。

今回、取組の事例集をまとめるにあたり、これらの取組が広く社会に伝わって地域の再生に繋がる一助となり、さらにこれらの取組を参考に今後の被災地域のつながり創出やコミュニティ再生に取り組まれる皆様の活動の一役を担えることができれば幸いに存じます。

最後に、本事例集の作成にあたり、取材や資料の提供等にご協力をいただいた各取組団体の皆様はじめ関係者の皆様方に、心から感謝申し上げます。

目次

事例

被災12市町村における地域のつながり支援事業 事例紹介

01	檜葉町活性化戦略事業	2
02	24 時間チャリティー野球大会	3
03	川俣町子育てサポートプロジェクト	4
04	被災地における発達障がい児の理解促進	5
05	川内村の地域を担う人材を育成する取組	6
06	ふるさとを味わいながら、なみえのまちづくりを考える駅近交流キャンプ	7
07	Origin for Future ～つながれ未来へ! 元気と笑顔プロジェクト～	8
08	PV協働制作をきっかけにした、ありがとうを連鎖させる新しいコミュニティ づくりに関する取組	9
09	北沢又団地陶芸教室同好会による「陶芸教室」「イタリアン料理教室」「コー ヒードリップ教室」	10
10	富岡町の伝統と復興に触れる取組	11
11	「コーラスふたば」の活動を再開し震災により離ればなれになった故郷の人た ちの心をつなぐため地域行事へ積極的に参加し勇気・希望を届ける取組。	12
12	相双地域で自然栽培を展開していくための農・食・販の連携事業	13
13	旧「警戒区域」に「世界で一番美しい場所」を創出するプロジェクトのキッ クオフイベント	14
14	ホップ農業を核にしたクラフトビール事業展開による地域活性化	15

※ 掲載している取組については、費用の一部を自己負担している場合があります。

取組
団体

一般社団法人ならはみらい

代表者 渡邊 清さん

取組
名称

檜葉町活性化戦略事業

取組の概要

町主催の「秋空散策あるこう会」のコース上に、健康や檜葉町の魅力をPRするような特色あるブースが設置され、檜葉町の史跡を解説するカードが置かれました。また、地域全体で帰還した子供達を見守る仕組みを構築するため、住民ボランティアによる、見守りを兼ねた花植え活動などが行われました。

■取組の様子

秋空散策あるこう会には町内外から約400名の方が参加しました。コース上には、この会をより楽しいものにしたい、檜葉町をもっと知ってもらいたいという、取組団体の工夫が散りばめられていました。

その1つが、コース上に置かれたかかしです。かかしには、史跡を紹介するカードが備え付けられ、参加者たちは、かかしを探しながら歩くという楽しみを満喫していました。木戸川漁協のヤナ場では、普段なかなかお目にかかれない生きた鮭を見学することもできました。木戸川の鮭の解説も行われ、参加者はふるさとの鮭には放射線の影響がないことを肌で感じる良い機会を得ていました。檜葉町で活動している各団体の取組を紹介する情報発信ブースも設置されました。それぞれの企画に、参加者の笑顔があふれ、時に感心しながら、檜葉のまちなみや秋の檜葉を堪能していました。

この取組をきっかけに新しい協力関係も築かれていました。これまで参加できなかった老人クラブ・社会福祉協議会による給水所の設置や、特別養護老人ホームリリー園による手作りの横断幕の作成など、町

全体で参加者を応援するあるこう会が実現されていました。

■実施者の声

「この取組をキッカケに、これまで連携が取れていなかった町内団体と、課題の共有とその解決に向けた取組を検討することができました。また、各団体ならではの意見が飛び交い、様々な世代や立場の町民を対象とする取組ができるようになりました。」

■参加者の声

「史跡紹介では、町民でも知らない内容が盛り込まれていて、町の魅力を再認識することができました。かかしを探しながら歩くのは楽しかったです。」

「情報発信ブースでは、健康に関する情報から町民の作品展示まで充実した内容のブースがあり楽しむことができました。」

「子供たちの声を聞き、共同作業をすることができて元気が出ました。子供たちは町の宝なので、みんな大切にしていきたいと感じました。」



取組
団体

D.W.F

代表者 渡邊 仁さん

取組
名称

24 時間チャリティー野球大会

取組の概要

双葉郡の各町村や田村市など、近隣市町村の方々も参加し、「福島県の復興と世界中の方々への恩返し」をテーマに、震災前に川内村で行われていた「24 時間野球」を復活させる取組が行われました。グラウンドには募金箱が設けられ、集まったお金が全額寄付されるなど、これまで支援いただいた方々への感謝の気持ちが込められた取組となりました。

■取組の様子

開会式には参加自治体の町村長が来賓として迎えられ、川内村の遠藤村長からご挨拶がありました。その後、子供たちによるソーラン節や、来賓の皆様による始球式が行われ、主審による『プレイ!』の掛け声と共に、長い1日が始まりました。

参加者約 250 名が「感謝チーム」と「絆チーム」に分かれ、協力し合って 24 時間を戦い抜きました。子供達が参加すると、子供たちの歓声や親御さんの叫び声がグラウンドに響き渡ります。プレイヤーとして参加していた、「一人ぼっち秀吉 BAND」のお二人によるゲリラライブもあり、グラウンドは大いに盛り上がりました。

川内村の夜は夏場とはいえ寒くなりますが、川内村のお母さんたちが作ってくれた豚汁が冷えた体と空腹を癒してくれました。開始から 12 時間もすると皆疲れが見えてきましたが、交代しながら夜通し野球を行いました。2 日目は快晴でとても暑く、プレイヤーの体力を奪っていきます。それでも掛け声と笑い声が絶えません。そしてついに

ゲームセット。結果は 101 回 105 対 115 で「絆チーム」の勝利。両チームとも、終わった瞬間に感嘆の声が上がりました。

■実施者の声

「参加者だけでなく、雑務をしながら野球に参加してくれたスタッフたちも、『また来年やりたい!』と口を揃えて言ってくれました。本当に『やってよかった』の一言に尽きます。ニュース等でも紹介され、たくさんのコメントをいただき、こんなにも注目されたイベントだったのかと改めて認識いたしました。ぜひ来年も開催したいと思います。」

■参加者の声

「こんなに多くの人に参加し、盛り上がった 24 時間野球は初めてです。本当に楽しかった。来年は 24 時間と言わず、もっと長い時間野球がしたいです。」



取組
団体

育児サークル・はらぺこクラブ

代表者 黒澤 沙希子さん

取組
名称

川俣町子育てサポートプロジェクト

取組の概要

震災後、避難先の住宅事情や仕事の都合などで家族が離れて暮らさなければならぬなど、子育て世代の負担が増えています。同じ悩みを持つ親同志のおしゃべりの場、育児の先輩から学び・相談する機会、日頃の育児から一息つける空間づくり、子育ての中の楽しみの発見、そして、男性の家庭生活への参画の促しを目指し、親も子供も一緒になって楽しめる、3つの取組が行われました。

■取組の様子

一つ目の取組は「おうちでできないぐちゃぐちゃ遊びで想像力と挑戦する心を育てる造形遊び」。「はらぺこクラブ」にちなんで、絵本「はらぺこあおむし」を題材としたアート作品づくりです。絵具をつけてみんなでぺたぺた。だんだん大胆になる子、「絵の具がおててについちゃったー。」と泣き出す子、絵の具の感触を楽しむ子、反応は様々。あおむしの体に中身を詰めたら大きすぎるはらぺこあおむしの完成！天気にも恵まれ、夏休みの良い思い出になりました。

「ベビードリームアート撮影会」では、ハロウィンアートや川俣町のゆるキャラ小手様と一緒に撮影会が行われました。その後、ママたちによる写真のデコレーション。待っている子どもたちも、ママをお手伝いしたり、パラバルーン遊びをしたり。みんなとても楽しそうでした。

最後の取組は「クリスマス準備会」。親子で力をあわせてツリータペストリーを作ったり、ケーキをデコレーションする取組です。サンタさんにプレゼントを貰い、子供たち

は御礼のお手紙を一生懸命書いていました。子どもたちの楽しそうな笑顔が、お母さんにとって一番のクリスマスプレゼントとなっていました。

■実施者の声

「普段の生活では、できない体験ができ、親も子供も楽しく参加いただけたと思います。またこのような機会を増やしていきたいです。そのために、賛同・協力してくれる構成員の数も増やして活動の幅を広げていきたいです。」

■参加者の声

「家では絵具を使つての遊びができないため、おうちでできないぐちゃぐちゃ遊びは、子供たちにとって良い経験になったと思います。」

「ベビードリームアート撮影会はママが主体のイベントでしたが、子供たちが飽きないようにと風船などの遊びも用意されていて、大人も子供も楽しむことができ満足できました。」



取組
団体

発達障がい児支援「つぼみ」

代表者 田子島屋 邦子さん

取組
名称

被災地における発達障がい児の理解促進

取組の概要

避難所での体験をきっかけに、自閉症など発達障がいのある児童への理解を深めてもらうため、発達障がい児支援団体「つぼみ」は、自作の紙芝居を各地で演じています。

今回の取組でも紙芝居が制作され、県内・県外で実演されました。障がい児（者）に優しい環境やコミュニティづくりを目指し、紙芝居終了後は参加者との意見交換（ワークショップ）も行われ、課題などが共有されました。

■取組の様子

紙芝居は、被災地だけでなく、大熊町の方々が避難している埼玉県川口市の仮設住宅など全9か所で実演されました。震災をきっかけに実施者と各地の方々と間に交流が生まれており、口コミの呼びかけにもかかわらず、20名もの方に参加頂けたところもありました。

紙芝居には、避難所での出来事や震災間もない頃の家庭内の出来事が描かれています。障がいをもっている人も訓練を重ね、将来の夢に向かって頑張る方の姿もあります。

読み手は気持ちをこめて紙芝居を演じます。聞き手はそれぞれの想いで紙芝居を見ています。紙芝居の後に行われたワークショップでは、震災当時を振り返り、困難だった出来事なども踏まえて、発達障がい児への理解促進から過ごしやすい環境づくりまで、共生に向けた意見交換が行われました。

■実施者の声

「発達障がい児を持つ親たちが集まり、語り合ったの

がこの活動の原点です。一見、普通の子に見える子供でも、発達障がいを抱えるケースもあります。こういう子供たちがいることをまず知ってもらい、これが「つぼみ」の活動の第一歩です。そして理解して欲しい、出来る範囲で手を差し伸べて欲しい。そういう願いを込めて、紙芝居を作っています。一方的にならないよう、参加者の意見をこれからの取組の糧とします。活動のお手伝いをしたいと参加者から嬉しい言葉をかけられることもあります。これからも、障がい児本人やご家族に寄添いながら、活動の輪を広げていこうと思います。」

■参加者の声

「自閉症児のことはよく聞きますが、広い意味での発達障がい児についてはあまり知りませんでした。このような取組により理解の輪が広がるといいですね。学校で紙芝居を行うなど、大人だけでなく、子供たちにも考えてもらう機会を設けてはどうでしょうか。」



取組
団体

川内村商工会

代表者 井出 茂さん

取組
名称

川内村の地域を担う人材を育成する取組

取組の概要

実施者には「川内村を中心とした広域的・中長期的な地域の振興やまちづくりを進めるためには、多方面において地域を担う人材の育成が必要」という強い想いがあります。今回の取組はこの実施者の想いが実行に移されたものです。先進的な事例や、普段触れることのできない知見・考え方を伝えるため、村外の他分野の専門家を招いた講演会と、講演会で得た知見に基づくグループワークが行われました。

■取組の様子

村内の事業者、帰還した住民、今でも避難している方、村外からの移住者、周辺地域の事業者など、村内外からたくさんの方が取組に参加しました。

講師は長野県小布施町（おぶせまち）で補助金に頼らない町並み整備や若者を中心とした地域活性化に取り組む市村次夫氏と、まちづくりを専門とする九州大学の高尾忠志氏です。

それぞれの講師からは、村の魅力を高めるために地域の資源がどのように活用できるか、そして、どのように国内外から広く人を呼び込んでくるかについて、自身の経験や事例を交えながらのお話がありました。

講演後にはグループワークが行われました。参加者たちは、講演で聞いた内容を踏まえて、川内村をより魅力的な地域にするために何ができるかについて熱心に議論していました。議論の結果は皆の前で発表され、それぞれのグループの想いや考えが共有されました。

■実施者の声

「講演会後に実施されたグループワークは、講演内容をブラッシュアップすることにつながりました。また、

それぞれの先進事例をどう川内村にフィードバックしていくかという熱い議論になりました。短い時間でのグループワークでしたので、参加者全員で合意をとる形で終える事ができなかったのが残念です。他方、グループワークの実施は参加者の普段思っていることを発信することができて、貴重な体験になったと思います。」

■参加者の声

「とても有意義な時間を過ごすことができました。グループワークはもっと皆さんと議論できるよう、もう少し時間を延ばすと良いと思います。」

「村外から来た人からまちづくりや地域の活性化に関する色々なお話が聞けて新しい発見につながりました。」

「由布院では、外部資本の参入に対して、ふるさとの風景が無くなってしまおうという危機感から、住民自らが地域や自分たちの在り方を考え、確立していったというお話がありました。こうした過程は今後の川内村の在り方を考える上で大変参考になりました。」

「講師の話聞くだけでなく、グループワークを通じて他の参加者から地域のことを考えての意見を聞くことができて参考になりました。」



取組
団体

なみえまちづくり CAMP 実行委員会

代表者 菅家 清進さん

取組
名称ふるさとを味わいながら、
なみえのまちづくりを考える駅近交流キャンプ

取組の概要

かつては郷土料理を振る舞う飲食店が多くあり、賑わいがあった浪江の商店街。その浪江の魅力を再確認・発見し、帰還意欲の向上や人々のつながりの維持、新たな交流や新たな事業の創出につなげていきたいとの考えから、浪江駅近くの広場にてまちづくりを考える「駅近交流キャンプ」が行われました。

■取組の様子

キャンプは9月と10月にそれぞれ1回、空き家が立ち並ぶ住宅街の一画にある広場を使って行われました。参加者には、すでに帰還された浪江町民だけでなく、町外に避難されている方、関東にお住まいの方などもいらっしゃいました。キャンプでは浪江名物の「なみえ焼そば」や、地元で獲れる「しらす」や「つぶ貝」を使った料理の作り方を学び、自らアレンジして料理してみたり、キャンプファイヤーを囲んで町の歴史や名前の由来を学ぶなど、楽しみながらみんなで語り合う場となっていました。さらに、夜には防犯を兼ねた見回りが行われたり、翌日には「まちづくりワークショップ」と題して、これからの浪江のまちづくりについて皆でアイデアを出し合うなど、今後のまちづくりについて考える良い機会となりました。

■実施者の声

「何よりも参加者が楽しんでいた様子が印象的です。どの場面でも笑顔や笑い声が絶えず、対

話も途切れる事なく続いていました。キャンプという共同生活の“体験”を通し、協調性や連帯感、友情が生まれ、ネットワークが予想以上に広がりました。このキャンプをきっかけに、「浪江が好きになった」とたびたび訪れてくれる方がいたり、参加者が企画して浪江で「あるけ・あるけ初詣大会」などのイベントが行われたりと、様々な広がりを見せています。この取組が少しでも町の活性化に貢献できたなら嬉しく思います。」

■参加者の声

「浪江のこんな街中でキャンプできるとは思いませんでした。とても楽しかったです。」

「浪江には情熱的な方が多く戻ってきていると感じました。魅力ある人たちが町に戻って、再生に向かって取り組んでいる姿を、私も発信していきたいと思います。」



取組
団体

ふたば未来学園高等学校を支援する会

代表者 鈴木 正範さん

取組
名称

Origin for Future

～つながれ未来へ！元気と笑顔プロジェクト～

取組の概要

ふたば未来学園高等学校の生徒たちがグループを作って、それぞれの町や村の特徴を踏まえたテーマを選び、地元の人たちと協力しながら、また、地元の人たちと交流しながら、「双葉郡8町村に元気と笑顔を与える」ための複数の取組を行いました。

自身も元気と笑顔をもらっているようでした。

■実施者の声

「これまでの経験を通じて、こうした取組は継続して行うことがとても大切だと感じました。私は卒業後、進学のために故郷を離れます。遠方にいても、避難している方のために自分にできることを続けていきたいと思います。」

■取組の様子

生徒たちは地元を元気にしようと試行錯誤しながらいろいろなアイデアを出し合いました。資料を調べたり地元の人たちからお話を伺ったり。こうして出てきたアイデアは地元の特産品や誇り、そして地元の思い出がつまったものです。営業再開できていない富岡町老舗菓子店の銘菓の復活、檜葉町特産のゆずや鮭を使ったおいしい給食メニューの考案、大熊町特産のキウイを使ったロールケーキの製作、広野町民の日常である大輪のやまゆりの試行錯誤しつつの栽培、葛尾村の凍みもちや川内村のイワナを使った新商品の開発。

■参加者の声

「久しぶりに孫のような若い人たちとふれ合い、元気をもらいました。また、作っていただいたケーキの味も格別でした。ありがとうございました。」

「20年後の双葉郡を支えるのは生徒の皆さんです。皆さんが双葉郡で活躍している姿を見守っていききたいと思います。」

どの取組でも、生徒たちは、地元の人たちと一緒にあって、時に指導を受けながら、アイデアを形にしていました。そうして作り上げたものを、地元の人たちや子供たちに披露し、懐かしさや楽しさを共有していました。特産品を広くPRするなど、将来的な産業復興にもつながるような取組も行われました。

こうした取組を通して、生徒たちは成長し、また



取組
団体

一般社団法人葛力創造舎

代表者 下枝 浩徳さん

取組
名称PV協働制作をきっかけにした、ありがとうを連鎖させる
新しいコミュニティづくりに関する取組

取組の概要

葛尾村には原風景とも言える美しい景色や、帰還した住民が挑戦している新しい産品があります。村の魅力を発信することを目的に、村内だけでなく周辺の若者も参加してプロモーションビデオ（PV）が制作されました。この取組を通して、村外の若者が村の魅力に触れ、葛尾村の高齢者は村の魅力を再認識しました。何より村内の高齢者と村外の若者とが交流するきっかけ作りとなりました。

■取組の様子

テーマは「自然・暮らし・挑戦」です。取組には、葛尾村の高齢者の他、村で新しく事業を起こした若者や近隣の大学生、東京の学生も参加しました。村の人達の話は新鮮なようで、若者たちは真剣に耳を傾けていました。その熱心な姿に、高齢者も自分でも忘れていたような話を嬉しそうに話していました。

クリエイターの指導の下、PV制作は朝方まで行われました。村人からは煮かぼちゃなどが差し入れられ、それを食べた若者達は、制作にさらに力が入ったようでした。

制作発表には副村長も参加され、村のホームページにも掲載されました。

参加者たちはこの取組の中で充実した時間を共有し、疲れの中にも満足げな表情が見られました。高齢者と若者の交流の中で次につながる新しいアイデアも生まれていました。

■実施者の声

「今回の事業を通して、今後の葛尾村を盛り上げてい

く活動に協力いただける方とつながることができました。また、ある高齢者の方は参加した大学生と孫のような関係を築き、定期的に連絡を取っているようです。その学生も、その方を祖母のように慕い、村の文化を次世代につなぐ活動を始めたようです。家族のようなつながりをつくることができたと思います。」

■参加者の声

「今まで若い人との交流がなかったので、つながりが持てたことをうれしく思います。震災でお世話になった方々への恩返しの意味を込めて取組んでいることを、村の人にも共感してもらい、横のつながりを持つこともできました。」

「静かな空間で制作に打ち込むことができました。この取組がきっかけで、葛尾村に半年滞在しての制作活動を春から始める予定です。村では野菜をいただくこともあるようなので、私も何かお手伝いするつもりです。」



取組
団体

県営北沢又団地陶芸教室同好会

代表者 熊田 伸一さん

取組
名称北沢又団地陶芸教室同好会による「陶芸教室」
「イタリアン料理教室」「コーヒードリップ教室」

取組の概要

県営北沢又団地には様々な地区からの避難者が入居しています。入居開始後間もないこの北沢又団地において入居者同士や近隣住民との交流を深めるため、大堀相馬焼の陶芸教室が開催されました。参加者が興味をもって参加できるよう、作った陶器を食器として使う料理教室も開催されるなど工夫を凝らした取組となりました。

機会はあまりありません。団地内だけでなく近隣住民や借上げ住宅の方にも参加を募り、回を重ねるごとに口コミで参加者が増えていきました。参加された方が、新たに参加を呼びかける形になり、非常に良かったと考えます。陶芸教室を行うことで、団地住民と近隣住民との交流のきっかけを作ることができ、新たなコミュニティ形成に、ほんの少しかもしれませんが役立つことが出来たと考えます。」

■取組の様子

陶芸教室は毎回自己紹介から始まります。新しい出会い・つながりが生まれるようにと主催者側の配慮で毎回グループ替えが行われるためです。お題に沿って自己紹介した後は、さっそく器づくりが始まります。浪江町民が親しんできた大堀相馬焼の窯元・近徳京月窯の先生が作り方を丁寧に教えてくれます。自己紹介をきっかけに打ち解けたメンバーは、一つのテーブルを囲んで和気あいあいと会話を弾ませながら制作に取り組んでいました。

完成した器を使った料理教室とコーヒードリップ教室も開催されました。料理は地元の野菜を使ったイタリアンです。故郷への思いを寄せながら作った器でいただく料理やコーヒーは、いつもと違った味わいを感じることができるものでした。

■実施者の声

「同じ団地住民同士でも棟を超えて交流する機会は少なく、ましてや近隣住民の方々と関わりを持てる

■参加者の声

「参加することで同じ団地に住んでいても初めて会う人や、近隣住民の方と話をすることができ距離を縮めることができました。」

「陶芸教室を通して顔見知りができ、楽しく参加することができました」

「借上げという立場で近隣町内に住んでいます。教室に参加することで、顔見知りが増え生活が楽しくなりました。」



取組
団体

一般社団法人とみおかプラス

代表者 大和田 剛さん

取組
名称

富岡町の伝統と復興に触れる取組

取組の概要

400年の歴史を持つ麓山（はやま）神社の伝統ある『火祭り』。震災後、祭りは行われず、伝統文化の継承が危ぶまれています。この火祭りを次世代に継承するため、祭りの歴史が学べる講座や使用される松明（たいまつ）作り教室などが開催されました。風評被害払しょくにつなげるため、地場鮮魚に触れ、知るイベントも行われました。

■取組の様子

取組は地元富岡町で開催された『ふたばワールド』にあわせて実施されました。

伝統文化の継承には地元高齢者の協力が不可欠です。松明作り教室では、子供からお年寄りまでたくさんの方が集まり、戸惑い、苦労しながら、手取り足取り指導を受け、楽しそうに大松明やミニ松明を仕上げていました。

富岡漁港を舞台とした釣り大会では、80cmを超える大物が次々とあがっていました。参加者たちは大興奮。釣った魚はどれも検出限界値未満であることが確認されました。表彰式では、一番大きな魚を釣った人が、はにかみながらうれしそうに賞状を受け取っていました。

■実施者の声

「麓山神社の「火祭り」で使われていた松明は、2m～2m50cmくらいの大きなものです。ふたばワールドに向けてワークショップ形式で開催した松

明作り教室では、本来の大きさのものを作成し、ふたばワールド当日の会場では来場者が持ち帰れる大きさで作成しました。どちらの参加者も初めてということもあり、松明を間近に触れることがで、麓山神社の「火祭り」の文化や想いの一部を持ち帰っていただけたと思います。

また、釣り大会を通して、今の富岡沖の状況と沿岸の復興の状況を肌で感じてもらえたと思います。」

■参加者の声

「このような大きなものを担いで、山を登っていたなんて思いませんでした。」

「麓山の火祭りの再開が待ち遠しくなりました。」

「富岡町の慣習的な松明を身近に置くことで、故郷を感じるができそうです。」

「富岡沖の海域の状態や復興の状況を垣間見て、有意義な時間を過ごすことができました。」



取組
団体

コーラスふたば

代表者 石井 満征さん

取組
名称

「コーラスふたば」の活動を再開し震災により離ればなれになった故郷の人たちの心をつなぐため地域行事へ積極的に参加し勇気・希望を届ける取組。

取組の概要

震災まで42年間活動を継続していた「コーラスふたば」。震災後2年を経て活動を再開しました。遠方に避難しているメンバーも含めた17名が、発表会に向けて一生懸命練習に励みました。メンバー同士の絆が以前よりも深まり、生きがいを感じられるような取組です。

■実施者の声

「毎月1回の練習はとても楽しく、毎回楽しみです。練習中は自然と会話も弾み、昔話に花が咲き絆が深まります。趣味を活かした明るい生活を築くことにより、明日への希望となりさらに交流の場が広がっています。避難されている方々が、「ふるさと」に希望を持ち続けることができるようにお手伝いしたいです。」

■取組の様子

練習は毎月1回行われます。レッスンの日はお互いの近況報告の日でもあります。離れているメンバーとも今まで以上につながりが強まっています。

ご指導いただく先生は上昇志向。褒めてレッスンをしてくれるので、毎回楽しくレッスンしています。ご高齢のメンバーの負担にならないよう声かけして助け合い、元気に参加できるよう励まし合いながらレッスンが進みます。回を重ねるごとにお互いの信頼関係がより深まり、希望が湧いてきます。

今回の取組では5つの発表会で練習の成果が披露されました。避難先から見に来てくれる方もいます。コーラスふたばの発表を久しぶりに見られたと懐かしんでいる方にも会えました。発表会は地域の方々とのおつながりを感じられる場でもあります。ためらうこともありますが、最後はやってよかった、楽しかったと感じる場面です。



取組
団体

相双自然栽培懇談会

代表者 前田 一男さん

取組
名称相双地域で自然栽培を展開していくための
農・食・販の連携事業

取組の概要

相双地域の農業は、福島第一原発の事故以降大きな困難に直面しています。安全・安心をつきつめ、農業を取り巻く課題解決と地域振興につなげようと、自然栽培を軸とした活動が始まりました。今回の取組では、自然栽培のすばらしさと可能性を伝え、参加者とともに考える場として、地元の方々を対象としたフォーラムが開催されました。

■取組の様子

難易度の高い自然栽培を根付かせるためには、担い手、販路の確保、社会への浸透に向けた戦略など、様々な課題について、関係者が共に考え、悩み、協力していくことが不可欠です。フォーラムでは、こうした課題解決につながる事例が紹介されました。

石川県羽咋市の高野誠鮮氏からは、米や農家を軸に限界集落を蘇らせた自身の経験が語られ、自然栽培のもつ可能性についてお話がありました。水稻の自然栽培の第一人者である古川哲次氏からは、自然栽培による米作りについて具体的に説明いただきました。フォーラムに向け、懇談会メンバーは、水俣市の自然栽培等の先進事例を調査していました。マイナスの状態からプラスへと転換した水俣市の取組について、メンバー間で議論を重ねた結果が、披露されていました。

決起会ともいえる今回のフォーラムには、農業・飲食業・流通業などの関係者のみならず、自治体の方も参加していました。時間が限られる中、参加者から積極的な質問が行われ、将来の担い手となり得る方々が参加した今回のフォーラムは、活動のスタートとして有意義なものとなりました。

■実施者の声

「相双地域の復興・再生に向けて、これまでの住民の帰還だけを期待するのではなく、新しい人を呼び込む

ための取組みが必要と考えています。自然栽培はその一つの選択肢となり得ます。先進地の事例を直接学び、フォーラムを通じて相双地域の皆さんに理解してもらう機会を作れたことは非常に有意義でした。高野氏や古川氏を始めとした他地域で自然栽培の取組む方にご協力いただけることも大変ありがたく思っています。

この取組みをきっかけとし、相双地域で自然栽培を支援・促進し、地域の食文化の魅力を発信していくことを目指して活動していきたいと考えています。」

■参加者の声

「相双地域でも戦略をもって生業である農業を復活できればよいと思いました。」

「高野氏のお話から、希望が見えました。本気でやるのが大事だと思いました。」

「高野氏のお話を熱く拝聴し、同じような事業に取り組む者として、味方を得た思いです。古川氏の取組は、相双地域での拡大・定着の観点から、もっと具体的にどの程度収益に絡むか聴きたいと思いました。」

「農家・JAを動かす知恵の力を感じ、パワーをもらいました。」

「自然農法の考え方について、理解を深められました。」



取組
団体

フルハウス・La MaMa Odaka クリスマス実行委員会

代表者 梶内 昌史さん

取組
名称旧「警戒区域」に「世界で一番美しい場所」を創出する
プロジェクトのキックオフイベント

取組の概要

地震・津波・原発事故によって大きく傷ついた住民たち、特に南相馬市に住む若者たちと共に、過去と未来に誇れる物語を創っていく、旧「警戒区域」に「世界で一番美しい場所」を創出するプロジェクト。実現に不可欠な地元住民の方々の理解と協力を促すため、その意義を発信するキックオフイベントがクリスマスイブに開催されました。作者自身による朗読会、ピアニストによる演奏、舞踏家による踊りの披露等。さまざまな芸術を体感する中、住民同士の協力関係が築かれ、新たな生きがいづくりにつながる取組が行われました。

■取組の様子

発起人である小説家・柳美里氏から、プロジェクトの意義を発信した後、プロジェクトに賛同する芸術家たちが、トーク、朗読、ピアノ演奏、舞踏などを繰り広げ、多くの地元住民や県内外からの参加者に対して各方面の芸術を発信しました。本格的な芸術を体感したことで、プロジェクトに対する理解の深化と、住民を始めとする参加者同士の交流に繋がりました。

■実施者の声

「これほどの人が集まると思いませんでした。文化的な楽しみを求めている方も多いのではないかと感じました。」

「他の作家とコラボレート出来たのが有意義でし

た。地元の方の真剣な眼差しが印象的でした。参加して頂いた方と直接話すことができる時間もあり、文化・芸術の魅力をより直接的に伝えることができたととても良かったです。」

「参加者の方が、様々な思いを重ねながら観ているであろう姿が印象的でした。南相馬の方達の思いを知ることは簡単ではないと思いますが、今回参加したことがそのきっかけになると思っています。」

■参加者の声

「とても素敵な会でした。見ている間、色々なことを思い出しました。ありがとうございました。」
「花が散らされる場面を見た時、除染によって自宅の木々が切り倒されるのを思い出して、涙が止まりませんでした。それと同時に、滝壺の淵に立ち、水飛沫を顔に受けたような清々しさも感じました。」

「とても温かいイベントでした。」



取組
団体

田村市クラフトビールの会

代表者 本間 誠さん

取組
名称ホップ農業を核にしたクラフトビール事業展開による
地域活性化

取組の概要

福島県田村市でかつて行われていたホップ栽培。クラフトビール産業を結び付けることでホップ農業を復活・活性化するという構想の下、田村市では、栽培を復活させ、クラフトビールの醸造所を造る計画が進んでいます。今回の取組では、こうした活動を地元知ってもらうため、クラフトビールをテーマとした講演会やホップ収穫体験などが開催されました。

■取組の様子

クラフトビールを地域を巻き込んでのまちづくりにつなげたいと、講演会は、クラフトビールの基本はもとより、地域をあげての取組事例の紹介など、参加者が身近に感じ、具体的に考えることできるテーマが選ばれました。

今や全国有数の集客を誇るビール祭を開催している岩手県一関市の事例、地元ホップを大きな財産としてクラフトビールを核としたプロジェクトを成功させた遠野市の事例です。どちらも地域をあげた取組です。もちろん、田村市の構想も紹介されました。

活動の中心となった講師の体験談、そして、地元で進んでいる計画に、参加者達は、大変興味・関心を持って聞いている様子で、積極的な質問も相次いでいました。飲食店経営者、地産品の販売者、農家、牧場経営者なども参加した今回の取組は、クラフトビールをテーマに、異業種交流の場としても盛り上がっていました。

■実施者の声

「ビールによってここまで地域を活性化できるということを伝えたいと思い企画しました。最初は、こんなにたくさんの方に来てもらえるとは思っていませんでした。このように多くの方が集まったのは、それだけ市民が醸造所に期待している証拠だと実感しました。」

ビールづくりには多種多様な方々が関わります。単にビールを売るのではなく地域活性化の接着剤として、人とモノを繋げる役割を担っていきたいと思っています。」

■参加者の声

「実例での紹介だったので、非常にわかりやすく、ビールのポテンシャルを感じました。」

「ホップを栽培してみようかと思いました。市民を巻き込み、行政と連携した遠野市の具体的な取組や仕掛けはとても勉強になりました。」

「田村市でクラフトビールづくりが成功し、交流人口拡大につながることを期待します。」

「醸造所ができれば雇用が生まれ、都路も活性化すると思います。」

「講演を聞いて、醸造所に対する期待が膨らみました。」

「課題は様々あると思いますが、魅力ある構想だと思いました。」

「田村市民としてワクワクしています。川内村など広域的に点と線で結んで、面として復興のシンボリックな存在になることを願っています。」

